



**Data**

監督・脚本・編集：胡波（フー・ポー）

原作：フー・ポー『象は静かに座っている』

出演：章宇（チャン・ユー）／彭昱暢（ポン・ユーチャン）／王雯（ワン・ユーウェン）／李从喜（リー・ツォンシー）／凌正輝（リン・ジョンフイ）／張小龙（チャン・シャオロン）

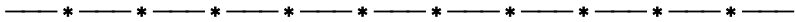
## 👁️👁️ みどころ

この邦題は一体ナニ？サッパリわからん！ならば原題は？英題は？クランクアップの7ヶ月後に29歳の若さで自殺した胡波（フー・ポー）監督は栄えある各賞の確認こそできなかったが、234分版の上映を喜んでいるはずだ。

しかし、4人の主人公を中心として、暗いスクリーン上で展開される「長回しの会話劇」を見続けるのは正直しんどい。時に近時の明るくわかりやすい邦画の方が楽という気持ちにもなるが、フー・ポーはなぜ長回しに、そして光の陰影にこだわったの？

他方、日本人はすぐに回答を求めるが、本作の回答は？冒頭に示される、満州里の動物園に一日中ただ座っているという象は、一体何を暗示しているの？そして、主人公たちはなぜそこを目指すの？

格差の拡大は、日本も中国も同じ。したがって、『カイジ ファイナルゲーム』（20年）のような描き方もあれば、本作のような描き方も……。あなたの賛否は？



## ■□■本作完成直後に29歳で自殺！フー・ポー監督に注目！■□■

夏目漱石が英語の授業を担当していた旧制一高の学生・藤村操は、1903年5月、遺書として『巖頭之感』を残して華厳滝に投身自殺したが、これが若者たちに与えた影響は大きかった。また、『人間失格 太宰治と3人の女たち』（19年）では、太宰が愛人の富栄と共に1948年6月、多摩川で入水自殺するシークエンスが美しく（？）描かれていた（『シネマ45』131頁）。

それと同じように (?), 1988年に山東省で生まれ、2014年に北京電影学院を卒業した中国の若き映画監督・胡波 (フー・ポー) は2017年3月14日に本作をランクアップさせたが、その7ヶ月後の10月12日に自殺した。享年29歳。彼の死亡後、本作はベルリン映画祭フォーラム部門国際批評家連盟賞と第1回最優秀新人監督賞スペシャル・メンションのW受賞を皮切りに、台北金馬獎では作品賞・脚色賞・観客賞をトリプル受賞、その他世界各国で高く評価された。なお本作は、彼が2017年に発表した自著『大裂 (Huge Crack)』の中で、自身が最も気に入っているという同名短編を映画化したものだ。

## ■□■自殺の原因は？確執は？なぜ234分の長尺に？■□■

2018年1月21日には、日本の保守派の評論家・西部邁氏が78歳で自殺した (自殺死)。これは、かねてからの彼の考え方に基づく予定の行動だったようだが、彼の2人の知人がその自殺幫助の容疑で逮捕されるという事件が発生したからやっかいだ。自殺した人に対して、「あなたはなぜ自殺したの？」と聞いても明確な答えは出ないはず。しかし、そうだからこそ、逆に「〇〇はなぜ自殺したの？」について、諸説が飛び交うことになる。しかして、フー・ポーの自殺については、「編集長が華流エンタメをつまみ食いしながら楽しむためのトピックサイト」である CHINA BLUE HUALAN (華藍網) に載っている『大象席地而坐 (象は静かに座っている)』胡波という映画監督で詳しく解説されている。

それによると、フー・ポーの自殺の原因は、本作のプロデューサーである劉璇と、その夫である著名監督・王小帥 (ワン・シャオシュアイ) との確執、そして2人が経営する映画会社・冬春影業との確執らしい。また、そのポイントは、フー・ポーが自ら編集した234分版に固執したのに対し、劉璇と王小帥が「あのロング版は酷すぎる。分かっているか？・・・お前は、他人がお前が表現したいという浅はかなものがわからない馬鹿だと思っているのか？」等と2時間版に縮小することを強要したためらしい。また、同記事によると、フー・ポーと劉璇・王小帥夫妻の確執はさまざまな形で展開したようだが、最終的に、本作の版權は自殺の1週間後、フー・ポーの母親たちに譲渡される形で一応解決らしい。そして、フー・ポーの自殺から4カ月後の2018年2月26日、ベルリン国際映画祭のワールドプレミアで上映された234分版の本作は絶賛されたわけだから、人間の運命は皮肉なものだ。

## ■□■このタイトルは？冒頭とラストの暗示は？満州里とは？■□■

渡辺淳一の連載人気小説『愛ルケ』が日経新聞に連載されていた (04年11月から06年1月まで) のと同じ時期に産経新聞に連載されていたのが、秋元康の小説『象の背中』だった (05年1月から6月まで)。そして、同作は役所広司の主演で映画化された (『シネマ16』382頁)。私はそのタイトルの意味を、連載小説を読んでいる時にわかっていたが、そ

れを読んでいなければ、なぜそんなタイトルになっていたのかは永遠にわからなかっただろう。

それと同じように、本作は原題も英題もそして邦題も同じ『象は静かに座っている』だが、それって一体ナニ？そんな疑問が解決しないまま上映が始まったが、その冒頭「満州里の動物園に一頭の象がいる。その象は、一日中ただ座っているという——」の字幕が流れてくる。しかし、それって一体何を意味するの？

さらに、本作ラストでは、満州里を目指してバスに乗って進む3人の男女が途中休憩で外に出ている時に、遠くから象の鳴く声が聞こえてくる。満州里ははるか彼方のはずなのに、なぜここまで聞こえてくるの？それもわからないまま本作はそこで終わるが、この「暗示」を見ても、結局タイトルの意味は分からないままだ。つまり、『象は静かに座っている』の解釈は、234分間という長尺の本作を観た1人1人の観客の解釈に委ねられているらしい。しかして、あなたは本作のタイトルの意味を如何に考える？

## ■□■この暗さ！この陰影！この構図！このこだわり！■□■

本作は冒頭の4つのシークエンスで4人の主人公を紹介してくれる。その第1に登場するのは、女と一緒に部屋の窓際で1人タバコを吸っている男チェン（チャン・ユウ）。その眼つきと態度はいかにも悪人風（？）だが、彼が一服しているといきなりドアが叩かれ、男が入ってきたからビックリ。さあ、この男はこの部屋で、一体何をしているの？そして、一体何が起きていたの？続いて第2は、狭い部屋の中で、初老の男ジン（リー・ツォンシー）に対して娘夫婦がしきりに老人ホーム行きを勧めているシークエンス。これは一体なぜ？ジンの決断は？第3は、家を飛び出し、1階でマッチに火をつけて天井に投げている（？）高校生のブー（ポン・ユーチャン）のシークエンス。彼はなぜ、ここで、こんなことをしているの？犬を散歩に連れて歩くジンとすれ違った後は、ブーの友人カイ（リン・ジョンフイ）や学校一凶暴な男シュアイ（チャン・シャオロン）が登場し、何かもめているようだが、正直私には何が何だかよくわからない。続いて第4に、しきりに身支度を整えている女の子リン（ワン・ユウウェン）が登場するが、トイレが水漏れしているのを発見したリンから水をかけられて起きた母親との間で、ちょっとした会話が……。

本作は冒頭に順次登場するそんな4つのシークエンスは、いずれも暗く陰影に満ちたスクリーン上にこだわりの構図で登場し、その中でいくつかの会話が交わされる形で物語が進んでいく。後でパンフレットを読めば、なるほどこのシーン、このシークエンスはこういう意味だったのかということがわかるが、正直スクリーンを観ている時には、誰が何のために何をしているのかよくわからないものが多い。しかも、近時の明るくてキレイ、そして何でも丁寧に説明してくれる邦画とは正反対に、スクリーンは暗く陰影に満ちているから見づらいうえ、何の説明もないから不親切だ。これから、こんなしんどいスクリーンを234分も見なければならぬの？

そう思うと、一方では気が重くなってくるが、ここまでの4つのシークエンスに登場してきた4人が本作の主人公らしいから、これからこの4人はどうなっていくの？そう身構えながら、「この暗さ、この陰影、この構図、このこだわり」がハッキリわかる本作の鑑賞を続けていくことに。

## ■□■同じ底辺を描いても、本作は『カイジ』と大違い！■□■

11月29日に観た『カイジ ファイナルゲーム』(19年)は、「東京2020」の終り以降、景気が恐ろしい速さで失速していった日本の底辺を生きる若者・伊藤カイジの姿を、藤原竜也の熱演の中で描いていた。しかして、底辺の若者を主人公として、その問題点を描く点では本作も同じだ。

ジンだけは初老の男だが、ブーとリンは高校の同級生。また、階段から転げ落ちて死んでしまった男シュアイはチェンの実の弟だ。また、ブーの友人のカイ(リン・ジョンファイ)がなぜ銃を持っているのかはわからないが、こんなわけのわからない男が銃を持っていると、『銃』(18年)、『シネマ43』255頁)や、『JOKER ジョーカー』(19年)で見たように、きっとヤバイことが起こりそうだ。他方、冒頭の第1のシークエンスが、実はチェンが親友の妻とベッドを共にしていたことがバレた後、その親友が窓から飛び降り自殺するに至る騒動だったことがわかるが、それについてのその後のチェンのたどたどしい弁解は・・・？

『カイジ』の中でも、「クズ」とか「カス」とかの汚い言葉が飛び交っていたが、それは本作も同じ。また、社会の「勝ち組」になってのし上がれない男たちが、「負け組」の中であがいている姿も、『カイジ』と本作は同じだ。しかし、そんな中、①バベルの塔、②最後の審判～人間秤～、③ドリームジャンプ、④ゴールドジャンケン等の「バクチ」で一攫千金の勝負を狙う伊藤カイジの姿と、本作のように、満州里の動物園で一日中ただ座っている一頭の象を見るために満州里に向かう主人公たちの姿は大違いだ。そしてまた、映画のつくり方も大違いだ。それは一体なぜ？

## ■□■すべてを長回しの会話劇で！俳優の力量がくっきりと！■□■

映画づくりは撮影作業が中心だと思われているが、実は撮影され仕込まれたフィルム(ネタ)の編集作業が映画に生命を与えるもの。本作はフー・ボー監督が自分自身でその編集作業を行ったが、本作が234分という長尺になったのは、彼が長回しで撮った1シーン1シークエンスを編集によって切り貼りすることを拒絶し、そのまま全部使おうとしたため。逆に言えば、ヒットする劇映画にするためには約2時間の標準サイズに編集するのが普通だから、本作のプロデューサーたる劉璇と王小帥がその作業をフー・ボーに指示(要求)したのは当然。ところが、フー・ボーはそれに従わず、長回しの会話劇をそのまま使うことを主張したため、劉璇と王小帥は「このロング版は酷すぎる！」と酷評し、23

4分版の上映をトコトン拒否したわけだ。

一般としては劉璇と王小帥の方が正論。フー・ポー監督が死亡（自殺）したこともあって（？）本作は絶賛されているが、234分間のすべてが長回しの会話シーンで構成されている本作をずっと見続けるのは、正直かなりしんどい。本作のパンフレットは4頁にわたってストーリーが会話劇の形で紹介されているので、前述したように、それを読めば、そのシーン、そのシークエンスの意味がわかってくるが、スクリーンを見ているだけで、それぞれの意味を理解するのはかなり困難だ。私はほとんど見ないが、日本のTVの（アホバカ）バラエティでは、司会者とひな壇に並んだ（安モノの）芸人がわれ先にとおしゃべり合戦を続け、また、どこかでオチをつけようと努力しているから、その会話劇自体は極めてわかりやすい。しかし、本作のように長回しのまま、必要限度しかしゃべらない会話内容だけではストーリー展開が読みづらいのは当然だ。たとえば、チェンが登場する冒頭の第1のシークエンスは、わかりやすいえば、浮気の現場に妻のダンナが踏み込んできた時のお話だが、日本のTVドラマなら、本作のようなまどろっこしい（？）描き方をせず、もっと直截にそれを描くはずだ。そんな風にスクリーン上の映像とセリフですべての状況を説明してしまえば、観客は半分寝ていても映画の筋はわかるから、ある意味で安心。しかし、本作の場合は・・・？

そんな風に本作は見ている客も相当疲れるが、演じる俳優たちも大変だ。フーテンの寅さんクラスになると、「こんなシーンなら、こんなセリフが登場！」と観客も理解ができる。しかし、本作のように日本人に全く馴染みのない4人の主人公たちが、状況説明が全くない暗い映像の中、少ないセリフと表情だけで自分の気持ちを説明し、ストーリーを理解させるには、俳優としての相当の力量が必要だ。しかし、本作の4人の主人公たちの俳優としての力量は？本作ではそれを234分間にわたってしっかり確認したい。

## ■□■「文章作れぬ若者」の記事に唾然！■□■

2019年12月5日付朝日、日経、読売、産経各紙の一面は、アフガンの復興に尽力してきた中村哲医師が銃殺されて死亡した記事だったが、それ以外は『内定辞退』利用で行政指導（日経）、「ゲノム編集の妊娠禁止」（朝日）、「日米貿易協定 来月発効」（産経）等だった。それに対して、読売新聞は「文章作れぬ若者」の記事を、中村医師死亡の記事以上のウェイトで一面に載せていた。これは、読売新聞が「12月3日に公表された経済協力開発機構（OECD）による国際的な学力調査で、日本の若者の読解力低下が浮き彫りになった。」ことに強い危機感をもったことの表れだ。

「国語力が危ない『読む・書く』の今（上）」と題されたこの記事は、「この公園には滑り台をする」のような、「主語・述語が不明確で意味が通じない」文章が近年、特に目に付く、ことを指摘。続いて、「ゼミで発表させると、『そして』『そして』『そして』・・・と連発する学生が大勢いる」ことを指摘している。また、その記事の見出しには、「文章作れぬ

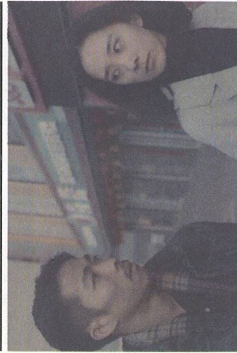
若者」「略語・スタンプ 言葉の乱れ、SNSから」「長文嫌い 接続詞は苦手」の文字が躍っている。私の実感も「まさにその通り！」だ。それに対して、とりわけ日本に留学している中国の若者は？さらに、フー・ポーのように中国の大学を卒業し自分の専門分野で活躍している若者は？

## ■□■コラムから考える、日中の若者の競争とその行方は？■□■

本作のパンフレットには①坂本龍一（音楽家）の「フー・ポーの神話、その一角」と②向井康介（脚本家）の「境遇と運命が対峙する時」という2本のコラムがある。中国本土への犯罪人の引渡しを可能とする逃亡犯条例改正案問題に端を発して、2019年3月に始まった香港の大規模デモの報道は全世界に広がり、ついにアメリカは11月27日に「香港人権・民主主義法案」を制定した。そんなアメリカの反応に対して、日本は？そもそも、日本の若者たちは香港のデモがなぜ起こり、それに参加した若者たちは何を狙っているのかについて、少しは理解しているの？また、そもそもそんな国際問題（ニュース）に興味を持っているの？それを考えると、私は暗澹たる気持ちにならざるを得ない。ジャ・ジャンクー監督との比較やロウ・イエ監督との比較まで織り込んだ後者のコラムはかなり難解だが、本作を鑑賞するについては必読！そこで彼は「人物と風景を余すことなく写し取るための長回し。結果、四時間という長尺になっているが、致し方のないことだ」「無理に短くしようとすると、映画はきっと綻んだにちがいない。」と書いている、さてあなたは？また彼は、「象は間違いなく何か（やはり神かもしれない）の暗喩だろう」と書いているが、さてあなたは？

他方、前者のコラムは「ホア・ルンの音楽は、歪んだギターと、チープでアナログなシンセサイザーが非常に効果的で、荒んで希望のない社会を、音楽でも響かせていたと思います。」と述べた上で、近時の中国（北京）の若いミュージシャンたちの音楽事情についても解説している。私にはその内容はよくわからないが、私の目を引いたのは、最近話題の「ビー・ガン監督」に触れていること。そこで彼は「彼の2作目、『ロングデイズ・ジャーニー この世の涯へ』は、後半の1時間が3Dになっているんです。彼はまたフー・ポーとは全然タイプの違う、自信満々な人柄が感じられますが、対照的で面白いなと思いました。」と書いている。この映画は、来年2月末からシネ・リーブル梅田で公開されるので、私が「こりゃ必見！」と考えて資料を集めていたもの。近時の邦画のレベルがどんどん低下していることを実感する一方で、表現の自由の規制が厳しい中国で、フー・ポーやビー・ガンのような若い才能ある監督が次々と登場してくることにビックリ！かつて第6世代の旗手、若手監督の代表と言われたジャ・ジャンクーも、今や平遥クラウチング・タイガー・ヒドゥン・ドラゴン国際映画祭（平遥国際映画祭）を立ち上げるほどの影響力をもっているから、すごい。このように、日中の若者たちの競争を比較すると、明らかに日本が負けているようだが……。さて、その行方は？ 2019（令和元）年12月10日記

象は静かに座っている



(C)MS, CHU Yanhua and Mr. HU Yongzhen

原題：大象席地而坐  
監督・脚本・編集：胡波  
出演：董宇／彭昱  
／王玉露／李丛  
／凌正辉／张小  
龙  
制作年：2018年  
中国映画・234分  
配給／ビターズ・  
ド

本作を監督した胡波（フー・ボ）は、1988年に山西省で生まれ、2014年に北京電影学院を卒業した中国の若き映画監督だった。2017年3月14日に本作をクランクアップさせたが、その7カ月後の10月12日、29歳で自殺。彼の死後、本作はベルリン映画祭のフォーラム部門国際批評家連盟賞と第1回獻藝秀新人監督賞スペシャル・メンションのW受賞を皮切りに、台北金馬獎では作品賞・脚色賞・観客賞をトリプル受賞。その世界各国で高く評価された。本作は、彼が2017年に発表した自著『天裂（Huge Crack）』の中で、自身が最も気に入っている巨岩懸崖を映画化したものである。4人の主人公を中心に、随いスクリーン上で展開される「長回しの会話劇」。フー・ボが監督自身がその編集作業を行った

が、本作が284分という長尺になったのは、彼が長回しで撮った「シー・シー・クエンス」を編集せずにそのまま全部使うことを希望したため。逆に言えば、ヒットする映画にするためには約2時間の編集サイズに編集するのが普通だが、2018年2月26日、ベルリン国際映画祭のワールドプレミアで本作は絶賛された。状況説明がない中、少ないリアリティと感情だけで長尺のストーリーを理解させるには、俳優としての相応な力量が必要になってくる。かつては鑑賞で優勝したが、廃れてしまった中国の小さな田舎町。少年フーは自身が起こした事件をきっかけに町を出ようとするが、友人（トウ）や人々（シン）を巻き込んでしまう。主人公たちは300キロ離れた先の溝州星にいる、1日中ただ座り続けている奇妙な象の存在にわずかな希望を寄せるのだが…。

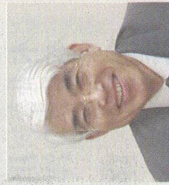
タイトルにもある「象」は一体何を暗示しているのか、284分間の長尺を鑑めた観客一人ひとりの懸念と象られているらしい。あなたは本作をどう捉えるのか…必見である。

熱血弁護士

坂和章平

中国映画を語る (35)

映画を語る「シリーズ」をはじめ映画館に置ける書庫めぐり。会社・日々は参考まで、NO.1大阪府日中友好会理事。



(さかわけ・しちろう)  
1949年生まれ。徳島県徳島市生まれ。大阪大学法学部卒。都府県警察に関わる職務を数多く手がけ、日本福祉社団卒会（元川崎）、同時に日本労働連合会「美濃源を賞」を敬慕。「長編的中国語教科書（2004年）」「二二〇のマジック」を著す。